特集論文

ソーシャルワークにおける先行研究検討の意義と文献検索の方法

木原活信

先行研究，文献検索，ソーシャルワーク

1．先行研究の意義

本稿では，ソーシャルワークの先行研究の意義と文献検索の方法について考察していきたい．先行研究とは，文字通り，自分が取り上げようとする研究課題に対して，すでに行われた先人の研究成果である．たとえば，あるテーマを見つけ，文献検索（検索方法については後述）すると，関連する研究も含めてかなりの論文や著作があるはずである．そのようなものは自分だけが独創的に思いついたと考えがちであるが，実際は，既にかなりの先行研究としての文献の蓄積があることに気づく．「日の下には新しいものは何もない」「今あることは，すでにあったこと，これからあることも，すでにあったこと」(伝道者の書1章9節；3章15節，新改訳3版）と古くから言われるとおりである．

そうなると，そもそもなぜ自分が今，あえて主体的に書かねばならないのか，ということになる．他の誰かがすでに過去に研究成果を発表し，その主張も結論も同じであることがわかったのなら，何も特段，改めて新しく論文を公表する必要はないはずである．実際，その通りである．知識体系の整理を目的とした大学のレポート提出であるならいざしらず，学術論文として世に問うということになれば，少なくとも自己満足以外に積極的な意義は存在しないことになる．

そうすると，あえて既に先人がやった研究を自ら改めてやるという場合には，それなりの「作法」が求められることになる．それは自分がいま論文を書く必然性があるか否かの根本問題なのであり，あえて今書く必要があるというのなら，それがなぜかを世に問うということになるのである．また先行研究検討の結果，未だ明らかにされていない課題，研究方法等を絞り込み，今後，何を自分が書くかということも明らかにされてくることになる．

実際，ソーシャルワーク研究の領域において論文査読や学位論文を審査する経験から気づいたことであるが，この意味での先行研究の検討が十分になされていないものが多い（自戒の意を込めてでもあるが）．そこには幾つかのレベルがあるのだが，先行研究の検討が①全くなされていない，②なされているが十分でない，③十分なされているが批判的検討になっていない，④十分になされており批判的検討を行っている，というおおよそ4段階である．①②は論文に値しないということになり，査読論文ではおそらく却下されるであろう．むろん，テーマによっては本当に先行研究がないという未知の領域があるかもしれない．問題は，③と④の違いである．ソーシャルワークの研究分野において目につくのが，③のパターンである．たとえば，あるテーマを研究しようとした場合，それに関する諸論文，著作を十分に紹介しておきながら，批判的な考察がなされておらず，先行研究の単なる紹介に留まってしまって

きはら　かつのぶ：同志社大学

いるのである．そうなると，結果的にこれまで蓄積された先行研究から，その人自身が研究上に新しい知見を加えるべき観点は何か，あるいは研究されていない課題は何かということが曖昧になってしまう．これが曖昧であると，結局，これまでの先行研究において自分がこの論文によって新たに付け加えたいことがらが不明瞭となり，論文として焦点の絞り込みのない歯切れの悪いものになってしまう．つまり，先行研究の批判的検討というのは，先人の研究成果を十分に検討した上で，その研究における欠陥や，矛盾点，課題を議論していくという避けることのできない一連のアカデミック作業に他ならないのである．一概には言えないが，社会学や哲学等の論文と比較して，ソーシャルワーク関連や社会福祉の論文においてはこの視点が弱いと言えるかもしれない．

2．ソーシャルワークの先行研究の批判的検討

先行研究を批判的に検討するということをさらに踏み込んでもう少し説明したい．これは，先人の研究に敬意を示しつつ，それを超えるべく未知の領域を開拓していくことになる．これは誤解されている向きもあるが，何も先人を「非難」しているのでなく，先人の研究成果を確認して，その到達点を明らかにしていくということであり，アカデミックな領域では避けることのできない一連の作業である．

この作業が正確に，確実にできることによって，自分の研究の独創性が何であるかが明確になっていく．ただし先行研究を超えると言っても，その超え方もさまざまであろう．誰もやっていない未知の領域を発見して，そこに独創性を見出す場合，あるいは，研究内容としてはすでに行われているが，不十分な検証の仕方，研究方法上の欠陥を明確にして，自らの方法で改めて修正していくという場合，などの例である．こうして，自分が先行研究を超えた，あるいは隙間の一部を担ったことによって，はじめてその論文のオリジナリティを明確にし，そしてその研究意義が生まれてくるのである．

そうなると，先行研究を超えるということは並大抵でないことがわかるであろう．たとえ先行研究を超えて，新しい見地を発表したとしても，自分の書いたことには責任が生まれ，自らも反論されることに当然の覚悟がなければならない．そして時間とともにやがてそれも先行研究の一つとして，自らの研究も乗り越えられる対象，批判を受ける対象となるのである．

ところで，ソーシャルワークという領域に限定した先行研究の検討というのは，これらと少し違った観点があってしかるべきである．なぜなら他の領域と比べて，それはすぐれて実践志向が強いからである．ここが研究方法論上のポイントにもなる．文献研究という意味で限定すれば，確かに先ほど来説明してきたとおり，先行研究を超えるということは並大抵のことではないが，しかし一方で，ソーシャルワークの特徴は，文献研究に収まらない，生きた現実そのものである実践対象を学とすることである．そうなると，今までの話をこれに応用すると，どんな実践が新しい知見になるのか，これを踏まえたような先行（実践）研究の批判的検討をすることによって，実践的含意が明確になるのである．

研究レベルだけでなく，実は実践そのものにおいても，このことは同様のことが言える．たとえば，ハル・ハウス（Hull-House）の創設者のジェーン・アダムズ（Jane Addams）は，英国のトインビーホール（Toynbee Hall）というセツルメントの先駆的実践，あるいはロシアのトルストイの先駆的人道主義的実践を，先行研究（実践）としてあらゆる角度から批判検討し，それを単にコピーするのではなく，自らのフィールドであるシカゴのスラム街に応用して，特に，青少年問題，移民問題，女性問題に再解釈した上で新しい実践として独創的に創造していったのである（木原，1998）．あるいは石井十次は，英国のバーナード・ホーム（Dr. Barnardo's Home）やジョージ・ミュラー（George Müller, 1805-1898）の孤児院の先行的実践を当時としては容易ではなかったけれども，諸文献を海外より取り寄せ翻訳するなどして断片的ではあったがこれらを研究しつつ，岡山というローカルな所に応用していったというような実践例である．これは実践における先駆的形態から批判的に先行実践を学ぶことの一例である．

社会福祉の研究面でも古典的であるが一例をあげると，チャールズ・ブース（Booth, C.）とラウントリ

ー（Rowntree, B.）の貧困調査である．周知の通り，ブースがロンドンにおいて貧困調査を実施したが，のちにラウントリーはその先行研究の成果を踏まえつつ，ロンドンではなく，ヨーク地方において，家計，ライフサイクルなどの概念を駆使して同様の貧困調査を実施した．これはブースの先行研究を改めて自らの文脈で関連づけ，それを踏まえて新しい知見を解明していったのであり，先行研究を乗り越えつつ創造的に見出したというもう一つのいい例であろう．

以上，先行研究（実践）を検証しつつ，それを踏まえることの意義について触れてきたが，それには効率良い方法が求められる．以下では，そのための基本である文献検索の方法について検討していく．

3．図書館活用方法

これらの文献検索を効率的にすすめるにはその宝庫である図書館活用がまず先決である．筆者が，トロント大学で在学研究しているときに，大学附属図書館のロバーツ・ライブラリー（Robert Library）を利用していたが，そこは冊数，機能面で，カナダ一であるだけでなく，世界有数の図書館としても著名である．そこのレファランス・カウンターには専門のライブラリアン（Librarian）が，資料探索，研究情報にかんして相談を受け付けていたが，なかでも，学位論文を執筆している学生たちが，熱心に相談している光景をよく見かけた．彼らの間で共通に言われたのは，「良いライブラリアンを見つけることが学位論文最短の道である」ということで，親しくなったライブラリアンと細かいところまで詰めて資料探索で相談をしていたが，学位論文に向けたさながら共同作業のような状態にすらみえた．それは，ライブラリアンの専門性の高さとまたプライドも垣間見るのであるが，当然ながら探索する側の探求心と真剣さが前提であり，まさに「天は自ら助くる者を助く」ということになるのである．

近年，井上真琴が『図書館に訊け！』（ちくま新書，2004）のなかで，図書館利用の心得，基本，そして現状，裏ワザに至るまでの詳細を紹介して話題となった．それを参考にしてもらいたいが，図書館員の仕事をソクラテスの「魂の産婆術」に擬えて「資料の産婆術」（井上，2004：178）とユニークな定義をしている．我々は，どこにでもいる「資料の産婆術」を利用しない手はない．高度情報社会にあって，本がどこにあるかなどの入門的な話は別として，高度な専門性を要する自らの資料接近において大いに「資料の産婆術」を利用するため，積極的に「図書館に訊け」ということを実践したい．

4．データベース GeNii 活用法

ここではまず，情報革命であるPCを中心とした文献検索方法を明らかにしたいが，これは，ある面で大学等の大きな図書館活用術の基本の一つとも言える．大学の図書館などは，情報データの拠点となっている．まずはここで簡単でかつコストもかからない情報検索データベースであるGeNii利用方法を確認することからはじめたい．

GeNiiとは，国立情報学研究所（NII）が提供する，目録所在情報サービス，情報検索サービス，電子図書館サービス等の総合的な学術情報サービスである．この情報サービスは学術情報に関しては，日本の国内最大の情報量をもつ巨大データベースである（学術以外も含めた総データで言えば，マガジンプラスが最大である）．そのほとんどが，無料で図書館のみならず，自宅でもネットにつながっている端末の環境であるならどこからも容易に検索でき，何かを研究するにあたっては，これをベースに検索を行うことが先決である．基本的なデータであれば，これだけでもかなりの学術情報や主要な文献に辿り着くことができる．その構成は，図に示したように五つのデータベースの柱から構成されている．

GeNii：NII 学術コンテンツポータル
（GeNii 公式サイト http://ge.nii.ac.jp/outline-j.html）

GeNii 総合検索システム	総合検索	→	CiNii（サイニィ）：論文情報ナビゲータ	【一部有料】
		→	Webcat Plus（ウェブキャット プラス）	【無料】
		→	KAKEN：科学研究費補助金データベース	【無料】
		→	NII-DBR：学術研究データベース・リポジトリ	【無料】
		→	JAIRO（ジャイロ）	【無料】

その特徴は，総合検索機能を使えば，それが著作，論文，あるいは科研費などの報告書であろうと，キーワードを入力するだけで瞬時に検索可能となり，必要な文献の所在も判明される点である．

具体的な検索方法としては，まずGeNiiのサイトにアクセスして，著者名，キーワードや，論文のタイトルなどを入れてみると，さまざまな文献がヒットして，一覧が表示されてくる．ここで注意したいのは，ヒット数が多いからいいというのではない．たとえばあるテーマを調べてヒット件数が数百以上もあるのは一見喜ばしいことのように思えるが，これではあまりにもテーマが漠然としており，実はテーマが絞りきれていないことを意味する．具体的にどれぐらいのヒット数があれば適当であるかは一概に言えないが，実際的なこととして50以下になるのが適切であろう．

たとえば，漠然とソーシャルワークについて調べたいと考えて，「ソーシャルワーク」と入力してみると，Cinii論文検索だけで3,000近くがヒットしてしまい，これでは結局何が必要な情報なのか調べようがない．もちろん，どのような用語が研究されているのかという統計的なデータを知りたければそれは有効な手段となるが，一定のテーマを絞っての文献検索ということにならない．そこで，さらに絞り込みをして，「ソーシャルワーク＊自殺」と入力してみると（＊はスペースを空けるだけでよい），Ciniiの論文検索で5件，国会図書館所蔵の著作WebcatPLUSで4件，科研5件，学術データNIIで2件と合計18件がヒットする（2009年3月現在）．これは，直接チェックをする必要のある基礎データであるといえる．つまり「ソーシャルワークと自殺」という研究であれば，まずはこの18件の文献にあたってみるということが最低限求められることになる．こうなると，文献検索としては現実的であり，ひとまずは有効なものになる．そしてその資料の所在について指示があるので，それをチェックする．該当文献が自分の所属する図書館に無い場合―通常は，その場合のほうが多いが―，大抵はその所属図書館から取り寄せ可能である．図書館によって異なるので一概に言えないが，たとえば同志社大学の場合，端末画面上から図書館に依頼ができ，通常1週間ほどで文献が手元に届く．

他にもマガジンプラスなどの文献検索方法もある．このマガジンプラスは総データ量としては日本最大であり，学術以外の情報も幅広く収集できる意味では価値があり有用であるが，学術情報に限定した場合は，Geniiの方が優れている．あるいは手軽なものとしては，Google提供の検索対象をインターネット上の学術情報に特化した検索エンジンもある．

5．外国文献検索

国内の論文検索は，上記のもので十分であろうが，外国文献，専門文献については，利用方法の基本は同じであるが，さらに検索方法がある．かつては，専門的文献を入手するためにはわざわざ現地の図書館や資料館などに足を運ぶのが基本であったが，今や情報ネットワーク網の発達により，国内からも検索が可能であり，協定している大学図書館間等では郵送利用等も可能である．

外国文献の基本的なところでは，アメリカのOCLC（Online Computer Library Catalog）が提供するWorldCatが有用である．これはOCLCが提供する検索サービスFirstSearchに含まれるデータベースで，書誌は5,000万を超える欧米文献を中心とした世界最大の総合目録である．使用にあたっては有料であるが，大学図書館では，大学負担で，利用者が無料で利用できるところもある．その他，Scopusは，エルゼビア社（Elsevier）が提供する世界最大級のデータ量を誇る索引・引用文献データベースを中心とした新しい学術情報データである．これは科学・技術・医学・社会科学分野の研究の情報探索や論文作成の生産性・効率性を上げるために開発された．1996年以降の参考文献へのリンクがはられており，共通の参考文献を有する論文の検索も可能となっている．ただし，先ほどのGeniiと異なり，Scopusなどは，あらかじめユーザー設定が義務づけられており，ID保有者のみ大学等の大きな公共図書館からしかアクセスが許されておらず，大学等のシステムにもよるが，自宅の端末からは，特殊な事情は別として基本的には利用不可能となっているので要注意である．このほか，EBSCOhost社が提供の社会学関連の索引・全文データベースは，社会

学系の領域の文献を中心にしているためその検索には最適である．社会学関連の図書・雑誌・会議録等の論文記事の検索と全文閲覧が可能となっており，専門的な研究論文の検索に役立つ．このデータには，社会福祉やソーシャルワーク文献も多く含まれている．あるいはWiley-Blackwell社の学術雑誌の全文データベースも，人文・社会・自然科学分野それぞれの論文記事検索と全文閲覧が可能である．これらは，Scopus同様に，基本は有料であり（通常，大学図書館が支払っている），ユーザー設定があるので，利用する各大学等でIDを取得が条件となっていることが多く，使用条件を確認してみる必要がある．

6．専門文献の検索

ソーシャルワークの文献研究に特化した場合，全米ソーシャルワーカー協会（National Association of Social Workers, NASW）が提供するソーシャルワーク文献に絞ったデータベースがある．それは，Social Work AbstractsとThe Register of Clinical Social Workersのふたつのデータベースから構成されている．前者はおもにソーシャルワークおよびヒューマンサービスの分野について1977年からの最新の研究論文，情報を集録しており，後者は米国のソーシャルワーカーの掲載名簿である．これらの使用も基本的に有料であり，日本の通常の大学図書館では利用できるところは少なく，社会福祉系の学部学科がある所のなかでも使用できるところに限られているので，図書館，学部等に問い合わせる必要がある．このほか，ソーシャルワークの情報，文献については，Social Work Access Networkが有用である．これは，南カロライナ大学（University of south Carolina）が提供するデータベースおよび情報検索で，特に北米のソーシャルワーク領域の多方面に文献検索，情報検索が可能である．自宅の端末からキーワード検索だけでかなりの情報が入手できる．サイトは以下の通りである．http://cosw.sc.edu/swan/media.html

文献検索の基本は，主に上記のものになるが，ソーシャルワークなどの研究において必要な政府の統計資料などは，e-statなどが重要である．これは，個人の端末からアクセスできる．サイトは以下の通りである．http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.doあるいは，政府の統計全般であれば，e-GOV総務省運営の行政ポータルサイトは，各府省の行政情報が横断検索可能である．また，国際的な統計であれば，OECDが提供するThe OECD's Online Library of Statistical Databases, Books and Periodicalsが有用である．他には，ICPSR提供のアメリカを中心とした世界各国社会調査のデータベースもある．政治，社会，歴史，経済，教育，高齢者，犯罪，公衆衛生，社会心理学，教育，法律および国際関係などの社会科学に関する調査データを，学術研究のために利用することが可能である．

7．情報の宝庫としてインターネット

オーソドックスな文献検索は以上説明したとおりであるが，実は，公式な文献ではないが，かなり有用な情報がグーグルやヤフーなどの検索サイトからも可能である．ただし，それは，かなり検索者側が主体的に精査をしないと，著作権，事実認識を含めて，疑わしい情報もあり，そのままそれが活用できるわけでもなく，それがそのままデータベースとならないことはいうまでもない．しかし，一方で学術論文だけが重要な情報であるとは限らない場合がソーシャルワーク研究の領域では頻繁におこりうる．特に福祉利用者側の生の声や主張は実際，学術論文では既に「加工」されたものとなっており，それ自体はもはや生の声ではなく，間接的なものとなっている．しかしこの点，インターネット上で流される情報のなかには，利用者自身の体験的な生の声がかなり含まれている．また同時にそれをめぐって同じ体験をもった者同士が相互に真摯に情報交換や議論をしたりしているサイトもあり，活きた情報として，重要な資源となることもある．むろん，それを研究のデータとして採用したければ，先述したとおり，検索者側の主体的な精査能力が不可欠であるが，それを踏まえれば文字通りインターネットは世界の生のデータがタイムリーに流されていることになる．現在では，一定の要件の情報コミュニティ内のサイトもあり，それらもより身近で信頼のおける情報となっている．

先の文献検索が公式の学術情報であるとするなら，学術論文以外のさまざまな動向を含めてその背景にある情報としては，これらの情報検索方法を補足的に利用すると，それも有用であるといえる．

8．アナログ方法による資料探索

これまで俗称「芋づる方式」と言われて親しまれてきたが，PC 世代にはあまり馴染みのない方法がある．それは，さきほどの文献を実際に読んでそのそれぞれに記載さている参考文献をあたってみるという原始的な方法である．従来では当たり前のようにやっていた文献検索方法であるが，この方法でたとえば 10 の論文をチェックすれば，その 10 の参考文献にはどの文献にも参照されている共通の文献があることがわかってくる．つまり誰もが挙げている参考文献である．これだけは読まねばならないというようなものであろう．それらを読みこなしているうちに芋づる式に，参考文献がどんどんひろがってくるというやり方である．

先のデータベースを用いたやり方と併用していくことになるが，先のやり方の長所でもあるが，参考文献リストが瞬時にできるのと違って，このやり方は，地道な作業になる．読みながら参考文献リストに加えていくという方法であるので，時間もかかるが，一方で出来上がったリストは，自分自身がその時点で把握しているものであり，ハンドメイドの良さがあり，自分だけの文献リストとして有用である．

ただし，欠点がないわけでもない．それだけに頼ろうとすれば，必要な文献がリストから漏れていたり，行き当たりばったりになってしまい，ある文献を先に読んでおけば，もっと効率的であったというものが最後にわかるということがないわけでもない．

このようなことを考えると，今日，高度情報社会において，研究をする上で，どの方法を選ぶかということではなく，まずはこのデータベースから基礎文献リストをつくり，それを実際に読みこなしながら，芋づる方式などのアナログ方式を通してさらにそれを自分自身のリストとして検討していき，またインターネット検索などを用いて保管していくと，かなり洗練させていくのが適切であろう．

9．一次資料への接近

これまで説明してきたことは，文献検索方法の基本であるが，これは実は研究上における文献レベルからすると，二次資料の扱い方ということになる．つまり，データベースの網にかかるものは原則，誰かが既に行った文献であり，いわゆる二次資料である．

周知のとおり，一次資料と二次資料は，主に歴史学の研究方法上において峻別される重要なタームであるが，ソーシャルワーク研究においてはこのことがあまり意識されていないのが実情である．前者が，研究上において加工を施していない原資（史）料のことである．これに対して二次資料は，一次資料をもとに研究者が解釈を加え研究成果等として公表したものである．

例をあげると，石井十次の研究において，彼自身が書いた手紙や日誌というのは，石井を研究するという意味において，一次資料（原史料）となる．それに対して研究者が石井十次を研究するにあたって，一次資料をもとに一定の解釈を加え研究論文や刊行物として公表したものが二次資料である．そうすると，データベース上に存在するものは基本的に，加工された研究成果であって原資料としての一次資料そのものではない．

一般的に研究に値する研究というのは，重要な一次資料を正確に使用しているかどうかが試金石となるが，そうなると，いかに一次資料を見出し，それに接近することができるかということがいい研究の前提条件となる．石井十次研究の場合であると，すでに一次資料の所在等が整理されており，日誌，書簡など，その目録なども揃っていることもある．しかし多くの研究では，制限なく，閲覧できる場合はむしろ少ない．一方でそれが手軽に閲覧できたりする場合は，その対象がすでに研究し尽くされているということも多い．石井十次研究の場合では，筆者も長期間にわたって関わったが同志社大学人文科学研究所がこれまでの先行研究を批判的に考察し，石井の「脱神話」作業が求められることを鑑み，まずは一次資料の収集整理，日誌のデータベース化をはかるなど数年にわたるプロジェクトを立ち上げて，

研究成果を徐々に公表し，それ以降，これらをもとにした石井十次の研究成果が急速に生まれてきた．そこには原資料の整理や発掘などの先駆的営為があったことを忘れてはならない．賀川豊彦研究の場合でも，明治学院大学や松沢資料館などが，組織的に文献調査をすすめ，スケールの大きな賀川に関する一次資料の収集作業をすすめている．これらの場合のような研究は，研究上興味があっても，自分が改めて一からやろうとすると，既に研究し尽くされている課題も多く，その中から先行研究を駆使して新しい知見を見出すというのは至難のわざであることも忘れてはならない．

ところが，社会福祉学研究の場合，実は，歴史学者や社会学者に指摘されたことがあるが，一級の貴重な原資料が福祉実践そのものの中にちりばめられているという「強み」があることを忘れてはならない．それは，たとえば，施設史研究という場合も，100年以上におよぶ原資料がそのまま倉庫などに眠っているとか，残念ながら不要としてすでに処分されていたということも少なくない．これらの資料は誰も研究をしたこともないし，そのもののなかに，貴重な一次資料が充満している．これらは先の図書館等やPCのデータベースなどにあがってくるものでないことはいうまでもない．福祉研究者が施設実践にかかわるか，それを理解し，懇意にしていると，施設の側からその全資料の引き取りを依頼されたり，整理の依頼が入ってくることも少なくない．これらに協力することで，自然と研究成果に活かされてくるのである．

またソーシャルワークの場合，文献だけでなく，当事者や利用者の発言そのものが，生きた証人としての「語り」というデータが身近にあるのである．この「語り」は，文献探索した得られた二次資料を分析するよりも，はるかに実践そのものの生データであり，そこからリアリティに接近できる可能性もある（木原，2004）．

むすびにかえて

以上，先行研究の意義と文献検索の方法について議論してきた．情報工学の技術体系がまだ不十分な数十年前には，数年もかかったような文献データ作成が，今や情報革命により，瞬時に得られるようになった．この驚異は，その苦労を知らない世代の者に伝えるのには，未だ電気もない時代に，自動車，電車，飛行機の効用を説明することに匹敵するほどのものであると言っても，あまり大袈裟でないであろう．それほど，今日，文献検索の情報化は進んでいるのである．

ただここには功罪がないわけではない．歩き回って，人を介しているうちに予想もせぬつながりが生まれ，そこから芋づる式で未だ誰も目にすることのなかった日記や書簡や原史料などが得られてくることなどがある．これはちょうど，新幹線や飛行機で移動中には決して目につくところのない庭先の動植物の発見に比することができよう．散歩していると，小道に咲いているタンポポの黄色い花びらの様子や，期せずして，リスを見たり，小鳥を見たり，あるいは地をのんびり歩くカメに出会う可能性も否定できない．あるいは見たこともない生き物に出会うこともある．そしてもし興味があるのなら立ち止まってそこでその生態を観察することもできるであろう．ところがこれはスローライフの歩行者にだけ許された特権であって，飛行機や新幹線の利用者には不可能であろうし，自動車や電車でも難しいであろう．

このことは文献検索においてもあてはまる．かといって，高度情報化社会となった今日，ハイテク方法を全く否定して，アナログ方法だけで研究をするのは，アーミッシュ共同体のように積極的にそれを喜びとして生活する人々は別として，通例は不可能であり効率的でもない．ただし，情報革命以降のデータ収集においても，本当にいい研究をしようと思えば，データベースによる検索と，地道なアナログ的な資料収集方法を補完させる両面必要になってくるのであろう．

最後に，一次資料との思わぬ出会いを紹介しよう．ある研究者の例であるが，研究対象にしている故人の墓参をしているときに，期せずしてその御遺族の方などと出会い，研究者のその故人への想いと誠意に打たれて，故人の手紙，日誌などをそのメモリーとともに，引き渡されたのである．これらは，研究者の打算的なものではなく，まさに歴史を超えて故人と出会うという真摯に対象に向かったことから得

られた結果であり，それこそ予期せぬ故人との出会いという研究の醍醐味でもある．

[参考文献]

井上真琴（2004）『図書館に訊け！』ちくま新書
木原活信（1998）『J. アダムズの社会福祉実践思想の研究』川島書店
木原活信（2004）「ソーシャルワーク実践への歴史研究の一視角―『自分のなかに歴史をよむ』こととナラティブ的可能性をめぐって―」『ソーシャルワーク研究』29(4)，相川書房
同志社大学人文科学研究所編（1999）『石井十次の研究』同朋舎
同志社大学附属図書館のサイト
http://www.doshisha.ac.jp/library/
南カロライナ大学サイト
http://cosw.sc.edu/swan/media.html
政府統計資料
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do
GeNii の検索サイト
http://ge.nii.ac.jp/genii/jsp/index.jsp